

変わる日本の「暮らし」と「まち」

信長ゆかりの地で始まった
安全で住みやすいまちづくり

愛知県清須市
新清洲駅北土地区画整理事業
(2015年・平成27年)

阿部民子 text by Tamiko Abe

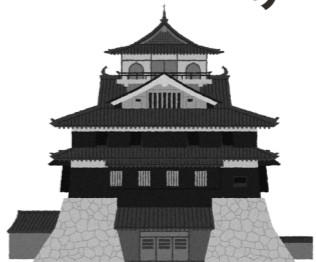


illustration: Shigeyuki Sakata

NHK大河ドラマ「麒麟がくる」に登場して注目を集めている清洲城。若き日の織田信長の居城であり、この城から天下取りの出発点となった桶狭間の合戦に出陣し、「出世城」としても名高い。現在の城は1989年、旧清洲町の町制100周年を記念して再建されたものだ。近くには清洲公園や桜の名所として知られる五条川などもあり、観光や市民の憩いの場として清須市のシンボルにもなっている。

そうした観光地の玄関口となっ

ているのが、名鉄名古屋本線新清洲駅だ。現在、この駅の北側では土地区画整理事業が進行中。この工事でまちがどう変わるのか、その未来を探った。

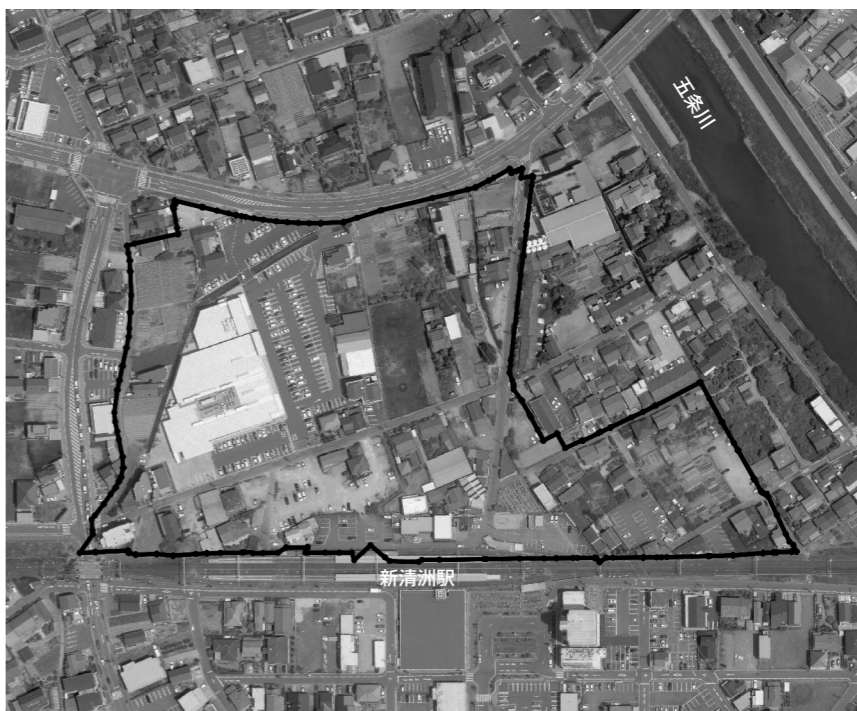
清須市の拠点として整備

名古屋市に隣接し、古くは尾張国の中心部として栄えた清須市。その拠点ともいえる名鉄名古屋本線新清洲駅は、名鉄名古屋駅から急行でわずか11分。清須市内でも多くの乗降客数を誇る。土地区画整理事業の施行者である

清須市の建設部新清洲駅周辺まちづくり課、林正樹係長に、事業の目的と意図を伺った。

「名鉄新清洲駅周辺地区では、線路の南側エリアは既に土地区画整理事業が終わり、駅前広場なども

整備されています。それに対し、北側エリアは都市的土地利用が図られていませんでした。鉄道の北側と南側が一体となった、地域の中心地にふさわしい整備は、市の長年の課題だったのです」



清洲城など観光地への玄関口でもある新清洲駅周辺(2012年4月撮影)。

北側エリアは、低層住宅、家内工業規模の作業所や工場、そして農地や未利用地などが混在。災害時に避難場所となる公園などの公共施設がなく、下水道の整備も遅れている。また、道路のほとんどは幅員4メートル以下で、駅から清洲城など観光地へのアクセスが悪く、行き止まりも多いなど、再編の必要があった。加えて、近辺では踏切による渋滞や事故も発生。近くを流れる一級河川の五条川と鉄道の交差点は川幅が狭く、改修による治水安全も望まれていた。

そんななか、2005年の市町村合併で、新清洲駅が「市の都市拠点」の1つとして位置づけられることになったのを機に、市施行による駅北地区での土地区画整理事業をスタートすることとなり、地区内を走る鉄道高架化も事業化に向けて進展。また、2000年の東海豪雨で河川改修の動きも加速。機が熟した形で、足かけ25年に及ぶまちづくり事業が始まった。「清須市には土地区画整理施行者としての実績がなく、人材やノウハウもありませんでした。そこで、鉄道駅周辺の市街地整備事業

を数多く施行するなどの実績があるUR都市機構さんに、新清洲駅北側エリアの事業を委託することになったのです」。

2015年、清須市とURは事業委託に関する基本協定を締結。URは、まちづくりの一角である約5・2ヘクタールの土地区画整理事業を支援することになった。工事は2018年9月に着工。以来、着実に事業が進められている。

観光の玄関口にふさわしい駅に

今回の土地区画整理事業では、まちの不便を刷新。安全で安心、暮らしやすいまちにすることが大きな目的だ。イベントなどできる公園を新たに作り、まちの顔となる駅前広場も整える。道路は観光地などへのアクセスを改善するとともに、万一の際にも避難しやすいように最低でも幅員6メートルに整備。道路の下には下水管や雨水管なども通す。住む人が暮らしやすいだけでなく、観光の玄関口としてもふさわしく生まれ変わる計画だ。

「URでは調査から設計、資料作成、工事の段取り、全体的な調整

など、我々が今まで培ってきたノウハウを駆使して、清須市を全力でお手伝いしています。市の拠点をプロジェククトに関われるのは光栄ですし、いいまちづくりができるように気概を持って業務に当たっています」と、UR新清洲都市再生事務所長の安藤寛が語る。

さらにこの事業のもう1つの特徴として、名鉄名古屋本線の高架化工事に必要な土地の確保がある。今回のURの事業地区には、鉄道高架事業区間約2・8キロメートルのうちの一部が含まれる。鉄道の高架化は一気にはできない。まず仮線用の土地を確保して本線を切り替え、高架構造本体部分造ってから、ようやく鉄道を高架に通すことができる。そのため、仮線工事開始までに、土地区画整理事業による移転や換地を行い、仮線用の土地を確保することが大きなミッションなのだ。

「鉄道高架化によって、踏切での渋滞や事故の解消に加え、現在は南北に分断されているまちが一体化。人のつながりや行き来が活発になり、より魅力的なまちへ生まれ変わることを期待しています」

と安藤。

共に事業を担当するURの浅見貴信も言葉を添える。

「新しいまちをつくるために、お住まいの方々にはいったん移転していただき、新たに整備した場所に戻ってきていただく。2度の移転が必要になるわけですし、先も長い。お一人おひとりのご事情を伺いながら、市さんと一緒になって、ていねいにお話をさせていただいています」。

まちの新たな顔となる駅前広場は、2022年の一部開業が目標。観光客のためにわかりやすい案内板を設け、清洲城や五条川への動線もシンプルになる。広場には、シンボルツリーとしてお城にふさわしい和の雰囲気のある木を植えたら、という話も出ているという。

清須市の掲げる将来像「水と歴史に織りなされた安心・快適で元気な都市」に向けて、まちは少しずつ変貌を遂げている。

街に、ルネッサンス

 UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

[企画制作]新潮社